

副詞“还”の基本イメージと教材の一例 —初級中国語教育の視点から

川 田 健

前言

中国語の初級段階¹を終え、中国語文献などを使った授業に進んだ際に、学修者が困難に感じられることの一つに、節相互の接続関係が捉えにくいことがあげられよう²。副詞は複文の接続関係を判断する指標であり、文全体の意味を決定する上で重要な役割を担っている。副詞に通底するイメージ学生に提示できれば、原書講読などの中級以降の学修に裨益するであろう。論者は川田(2019)において、“才”に「ぎりぎり」というイメージを立てて、そこから敷衍して多義語“才”を解説する補助資料を例示して批正を乞うたが、本稿では、同じく多義性を持つ“还”について、その根本義に関する先行研究を踏まえてそこから導き出されるイメージを抽出し、それに基づいて、初級段階から中級へ移行する学生向けの補助資料の一案を提示する。資料部分については、学生配布資料という性質上、川田(2019)同様、文体を「です・ます」調とすることをお許し願いたい。

1：“还”の基本義に関する先行研究の分析

『現代漢語八百詞』の“还”の項目では、語義を解説する際に平(普通

¹ 初級段階をどこに定めるかは各教育機関、専門性によって異なるであろうが、本稿では学修時間、文法項目とも三宅(2005)で示されている基準に基づく。本論では学修時間は「週2コマ(90分×2コマ)の授業を通年(半期セメスター×2期)」(p.126)、学修する文法事項大学の実験、実習科目4単位分を想定している。

² 三宅(2005 p.128)も指摘するように、中国語には動詞の活用などの形態変化がないことが語と語の意味関係が捉えにくくし、上級に進むほど解釈に苦勞する点が増えてくる。

—強調・抑制の気持ちを含まないもの)」「揚(強調)」「抑(抑制)」「感情」に大別してから項目を立てている。モダリティに基づいて意味の分類がなされていることから伺えるように、“还”は多分に話し手・聞き手の主観を表す語であると認識されおり、先行研究を俯瞰しても、“还”の主観性は重要なテーマであることがわかる。

“还”の用法を主題とする先行研究を通覧すると、①“还”に通底する意味を考察するもの、②認知言語学・語用論の理論を用いて機能を考察するもの、③“还”の語義の一部を考察する、もしくは“再”や“更”などの類義語との差異を考察するもの④外国人学生の誤用を分析するもの、に大別できる。そのうち本稿に特に関わる①を軸に分析し、学生に提示するためのイメージを抽出する。

①に関して、中国における先行研究を通覧すると、その結論は次の3種に大別できる。

- 1：延续—動作・状態が前の時点から続いている。
- 2：返回—帰る→重複する。
- 3：反预期—話し手もしくは聞き手の予想に反する結果を表す。

1：を主張するのは(高増霞(2002))である。高は、“还”の基本義は「連続」であり、その機能は、孤立した事象に対して、時間・スケール・予期の序列を生み出し、事象をその中に位置づけて活性化する³ものであると定義した上で、その他の用法はそのバリエーションであるとする。

例えば、a 今天吃面条(今日は麵を食べる)は一つの独立した事象だが、b 今天还吃面条(明日も(また)麵を食べる)のように“还”を加えることにより、その地点以前に麵を食べた過去の時点が立ち上がり、その点と、麵を食べる今日の時点が一つの直線上(ここでは時系列)に載ることによって、過去の地点と今日との間の連続が表される(p.28)。高はこの「連続」を基本義とした上で、文に“还”を加えて、独立したあ

³ 原文では“激活”。この語は一般的には「活性化(activation)」と訳され、本稿もそれに従ったが、事象がスケールや予期の序列におかれることによって活性化されるというのは、独立した個々の事象を時間や程度などのスケールのどこに位置するのかを明示することにより、その事象に対する話し手の感情や評価などが付け加えられるということである。

る状況を時間・スケール・予期の序列上に位置づけることによって、「予想外」などの主観を表現できることを論じている⁴。

2：を主張するのは童小娥(2004)である。童は“还”の現代中国語の意味を8項目⁵に分類した上で、『説文解字』の「還是復なり」と「復は往来なり」を引いて、まず動詞としての“还”(huan—還)⁶が「往」と「来」一方向が違うだけで同一行為の重複を表すことを起点に、「重複」に“还”の原型を求めている。そして『楚辞』『韓非子』などにすでに「顧」や「報」といった動詞と組み合わせられて使用される例を挙げ、「かえる」という純然たる動詞だったものが徐々に動詞の役割を組み合わせられた動詞にゆずり、「重複して」という意味に虚詞化するものであると述べている。他の意味についても、先秦から清代の文献を博搜してそれぞれの意味がどのように立ち上がっていったかを論じている。その結果、動詞としての「帰る」を起点として(1)重複(また)と転折(却って—現代語ではこの語義は消滅)とに分かれ、後者は「意外な気持ちの表出」に、前者は「連続」「範囲の拡大」「程度」「詰問」に展開し、「連続」はさらに「譲歩」と「強調」に展開するとして、各々の意味の変化のネットワークを提示している。

3を提示したのは武果(2009)である。武はYeh Meng⁷の提示した“还”の三段階の歴史変化、すなわち

第一段階 (5～6世紀)＝「動作の重複」。

第二段階 (7～9世紀)＝「添加(さらに～も)」「通増(さらに)」⁸「状

⁴ 「予期の序列上に位置づける」ということを、p.32の記述をもとに論者が補足すれば、人は発生した行為について、自分の心中にある基準に照らし合わせて、「発生して不思議のない状況」なのか、「発生するのが意外な状況」なのかを判断するが、それは一種の主観的判断であり、“还”が用いられている節は、自分の主観的基準に照らし合わせた上で判断されたものであることを示している。

⁵ すなわち(1)重複/(2)連続/(3)範囲の拡大/(4)程度/(5)譲歩/(6)意外な気持ちの表出/(7)反語中であって詰問の語気の強調/(8)強調。である。(p.448)

⁶ 贅言するまでもなく、本論で取り上げる副詞“还”は“hai2”、動詞(返す)は“huan2”と発音するが、便宜上、これ以降は動詞としての“还”は“还huan”と表記することとする。

⁷ Yeh, Meng (1998) On “hai” in Mandarin. *Journal of Chinese Linguistics* 26.2, pp.237-280.

態の持続（なおも）」。

第三段階（10～16世紀）＝「还是（やはり）」「反予期（意外にも）」「程度
の浅さ（数や時間が基準に達しない）」「比較」

が立ち現れたとする見解を承認した上で、それぞれの段階の意味を次のように総括する（pp.323-324）。

第一段階＝空間から時間意味への派生

第二段階＝時間からことば（客観的の重複の状態から、同一の話題
の中の添加、論理関係の重複や挺進）への派生。

第三段階＝状況の持続から反予期（予想外）への派生。

武は『朱子語類』中に“还”が主に疑問・反語に用いられたことに注目する。何かの命題に疑いを持って発せられる疑問文は、話し手が自分の予期があるものの、それを確信するに至らない。かくして客観的な持続の意味で用いられていた“还”に主観的色彩を帯びてくる。それは時代が下るにつれ、主観的色彩がさらに強まり、疑問文によらない反予期の用法が立ち現れて、また話し手の反予期から聞き手の反予期への拡大も発生する。そして、現代語における“还”については、客観的な状況の持続か主観性を帯びたものかを判定する際に、どちらとも解釈できるものや、主観性を帯びた反予期としか解釈できないものは存在するが、客観的な持続の意味にしかとれないものは存在しない。と述べる。さらに武は、史的言語学研究⁸の成果を踏まえ、客観的な持続義→話し手の反予期→聞き手の反予期へという発展は、具象的言語表現から主観化、さらに相互主観化という流れと一致する。つまり“还”の反予期の意味の発生と発展のプロセスが、“还”が主観化するプロセスなのである、と結論づけている⁹。

ほぼ同時期に発表された唐敏（2009）では、語義の源泉を古典におけ

⁸ 史的言語学についての用語の日本語訳は、前田満（2006）「Elizabeth C. Traugott and Richard B. Dasher: Regularity in Semantic Change (Cambridge: Cambridge University Press, 2002. xx+341 pp.)」『IVY』(38), 名古屋大学英文学会 pp.133-137, を参照。

⁹ “还”の主観用法については、沈家煊（2001）において、認知言語学の視点から、主観性とメタ言語の性質を述べている。また、武（2009）はそれを発展させて、主観性のメカニズムの中心にあるものを「反予期」であると述べている。

る動詞“还huan”に求めるのは前述童(2004)と同じだが、唐は往復運動におけるベクトルの違い、すなわち現在いる領域(原域)から目的地(目的域)への方向と、目的地から現在いる領域へ帰る時の方向が真反対である方に着目し、それが転接(かえて～となる)の意味を生じ、「反予期」の意味が表出する淵源であると論じている(pp.72-73)。

この後、管見の及ぶ範囲では、この後「反予期」と「主観化」を副詞“还”の中心に据えるという見解に対する異論、すなわち中心義を別の要素に見いだすべきであるという議論は見られず、「反予期」や「主観化」に対する各論¹⁰や、ある機能についての分析を深化させた論考¹¹に移っていく¹²。このことから「話し手や聞き手の主観を表すこと」「話し手や聞き手の予期とは違うことを表現すること」がその中核にあることを学生に教授することは、“还”の持つイメージを構築するのに有用であると言える。

ただ、これらはいわば“还”の持つメタな要素であり、意味の核心として学生にイメージを理解させるのは難しい。ここで一番に参照すべきは前田(2007)であろう。前田も前出童小娥(2004)や唐敏(2009)と同じく“还”の語源である動詞“还huan”、から説き起こすが、ラネカー(Langacker)の、ベースとプロファイルの理論に基づいて、動詞“还”の語源である動詞“还huan”について、「“还huan”(戻る/戻す)」という行為は、対象の移動の終着点、その対象のもとと存在していた領域内になければ成立しない(p.244)。述べ、「行く」という行為がベースとして存在してはじめて「帰る」という行為がプロファイルできる、したがって“还huan”は、そもそも出発点から別の場所に行っていたことがあることが前提としてあってはじめて成り立つ語であるとする。前田は、移動全体の出発点とプロファイルされた終着点を含む一定の領域を現状域と名付けた上で、現状域をP、往復の折り返し地点を～Pとすれば、“还huan”が描くのは、現状域Pから別の場所～Pへ移動し、さらに現状域P

¹⁰ 蔣静丽, 蔣静忠(2016)、罗芬(2016)など

¹¹ 李冬梅(2015)など

¹² これを些か極端にした論としては刘娅莉, 王玉响(2019)がある。虚詞にあまりに多義性を持たせるのは問題であり、語用論の視点から“还”についていえばすべて「反予期」を表す語であるとしている。

に戻ってくるという原状態回帰の軌跡である定義づける (p.245)。そしてその原状態回帰の軌跡について、前田は「事態の傾き」という概念を提示する。これは、“他还在睡觉”(彼はまだ寝ている)という文を例にとれば、先述の現状域P、その事態から変化した(目が覚めている)状態を $\sim P$ とすると、「話者がPから $\sim P$ への変化を意識していること」が事態の傾きである。「まだ寝ている」という事実は、「Pから $\sim P$ への変化の予想」に反しているわけだが、“还”の原義の「戻る/戻す」とは、「事態の傾きを予想して認識を $\sim P$ に向けたが、実際に観察される状態はPのままであるために、Pに認識を戻した。」ということで (pp.245-247)、この $P \rightarrow \sim P \rightarrow P$ という心理的な照合の軌跡について「[事実との照合の結果、その照合の軌跡が事態の傾きに反して現状域へと回帰することを表す現状回帰の軌跡]と規定することができる。」(p.248)と述べている。

前田(2007)では、“比”を用いた比較文(“A比B还W”—AはBよりもっとWである)、「なんとか許容できる範囲内」「意外性」のいずれもこの「現状回帰」で説明可能であるとする。先述の通り、中国における“还”の中心義として有力と見なされているのは「反予期」「主観性」であるが、論者は「事態の傾きとは、観察される状況によって話者の心理内に生じるものである。(論者補足—換言すれば、“还”が主観性を有する所以は、“还”がそもそも事態の傾きを原義として内包していることにある。)」[事態に傾きがあり、当然それに沿った結果が出るだろうという予測が外れれば、そこに「意外だ」という心境が生まれるのはごく自然な成り行きである。本稿は、意外性は“还”のさまざまな意味のうちの一つというわけではなく、“还”の使用上、自然に生じるものであると考える。」(p.257)という前田の論に左袒する。したがって本論の教材も、近年の中国の研究成果も包摂する前田の「事態の傾き—現状回帰モデル」をベースに組み立てることとする。

ただ、初級から中級過程に進むための学習教材という点で考えると、最初に提示するモデルは、よく用いられる用法とあまりイメージの乖離がない方が望ましい。日本人留学生における“还”の習得状況を分析した蔣协众(2013)では

还：行為動作の持続・進行あるいは状況の持続を表すもの。「依然として」の意味を含む。

还₂：項目・数量の増加、範囲の拡大を表すもの。

还₃：程度あるいは数量が一段階上がることを表すもの。比較構文で常用される。

还₄：無理して何かを実現することを表すもの。まあなんとか～する。

还₅：ある基準に達していないことを表すもの。「まだ～」

还₆：あることがらが、予想した時間より早いか速いことを示すもの。

还₇：譲歩。「～ですら」、後段の文で推論を述べるもの。

还₈：意外・軽蔑あるいは反語などの語気を表すもの。

の8項目に分類し (p.72)、それぞれについて、日本人留学生のHSKの作文¹³における“还”の使用と、その使用法の適否について分析を加えている。その分析の結果から日本の留学生における副詞“还”の習熟度は 还₁>还₂>【还₄>还₅】>还₃>还₆>【还₈>还₇】¹⁴であろうと推測している (p.77)。また、中国人の“还”の使用における「还₁」「还₂」の割合は80を越えるという研究結果を示している (p.77)。これを踏まえるならば、やはり

「还₁」=まだ：(例) 他还没来 (彼はまだ来ていない)。・他还在家里 (彼はまだ家にいる)。—状況の持続

「还₂」=さらに・ほかにも：(例) 她会说英语, 还会说日语 (彼女は英語を話せ、さらに日本語も話せる)。—項目の追加

を軸とすることが望ましい。また、日本人留学生の誤用が比較的多いものとして、“再”“又”“更”との混用があげられているが (pp.73-74)、「还₂」と“再”の重要な区別としてあげられるのが、前の動作と後の動作の論理的関係である。“再”は、一つの動作が終わってからの重複・持続なものに対し、“还”は連続性のある行為や事柄を表すものである (金立鑫, 崔圭铤2018 p.38¹⁵)。しかしそれは同時に「予想外」のニュアンスを導き出すものであるので、“一直(ずっと)”のような、目標に向かって障碍なく一直線に連続する概念ではないことは示されなければならない。前田

¹³ HSKは中国政府認定の中国語検定試験。蔣协众 (2013) が分析で用いたのは、北京語言大学の“HSK 动态作文语料库”ということなので (p.72)、2010年にリニューアルされる前のものである。

¹⁴ 記号【】についての説明はないが、【】内の項目は正答率が同じであるため、その中の順位の判断を保留にしているものと考えられる。

の提唱する「事態の傾き」—これはすなわち「意外性」の原点といえよう—と、「事態の持続」を統合するための図を用意して、次項では実際の補助教材を例示する。

2：“还”の補助教材の例

“还”は、「もとの場所に戻る」が原義です。日本語の「還元」の「還」ですね。現代中国語でも“还原”（原状に復する）“还书”（本を返す）など、「もどに戻る」「返却する」の意味の動詞として使います。動詞の時は“huán”、これから説明する副詞の時は“hái”と読みます。辞書的には「まだ」「また」「なお」などと訳されますが、これも「起点からある場所に行き、またもとの場所に戻る」という意味を起点として、「行為の重複」「状況の持続」というように意味が展開した結果です¹⁶。“还”にはもう一つ「予想に反して」という大事なイメージがありますが、それは後述しますので、まずは例文を見ていきましょう。

A<さらに一行為の重複・付け足し>

1：昨天我喝了一瓶汾酒，还喝了三瓶啤酒。

（昨日私は汾酒を1本飲んで、さらにビールを3本飲んだ。）

2：还要别的吗？（他のものも必要ですか→他に何かお入り用ですか？）

B<まだ・なお一状況の持続>

3：你们还没分手吗？（きみたちまだ別れていなかったの？）

4：别把碗收走，我还在吃呢。

（まだ(食器を)片付けなくて、私はまだ食べている最中なのです。）

5：我和大介的关系还是老样子，只是青梅竹马。

¹⁵ 金立鑫，崔圭铤2018では、明天还训练，真讨厌！（明日もトレーニングだよ、本当に嫌だなあ）を例文にあげて、「連続性」というのは、時間的物理的に間があいているかどうかではなく、話者がそれを一続きと認識しているかどうかにも関わると述べている（pp.39-40）。

¹⁶ 「また」は「同じ動作の繰り返し＝行為の重複」。「なお」「まだ」は状況に変化がないこと＝状況の持続」です。

(私と大介との関係はやはりずっと以前のまま、ただの幼なじみ。)

C <もっと一量や程度の進展・拡大>

6：俄罗斯比中国还大一倍。

(ロシアは中国よりまだ一倍分大きい<=二倍大きい>。)

7：张三比书架还高呢。(張三は本棚よりまだ背が高いんだ。)

D <案外・まあまあ・やはり一話し手/聞き手の想定外>

8：都8点了，你还来得及吗？(もう8時だよ、まだ間に合うの？)

9：真不知道你还是总经理呢，了不起。

(おまえ社長だとは知らなかった。すごいなあ。)

10：炸臭豆腐还挺好吃的。(揚げ臭豆腐って存外うまいな。)

11：我剪发了…，还算可爱吗？(私、髪切ったんだけど…可愛いかなあ？)

E <よくもまあ一皮肉や批判>

12：美玲，你贪吃零食还好意思说瘦不下来吗？(メイリン、あなたお菓子食べまくってまだずうずうしく「やせない」とか言っているの？)

13：亏你还是个哥哥！妹妹的心情，你一点儿也不懂。(よくもお兄ちゃんなんて言えたもんね、妹の気持ちを全然わかってないくせに…)

“还”は「まだ」「また」「なお」と訳すことができますが、冒頭でも申し上げたとおり、原義は同じ所に戻ってくることです。Aは今いる場所(現状域と呼びます¹⁷)で、現状域とは違う世

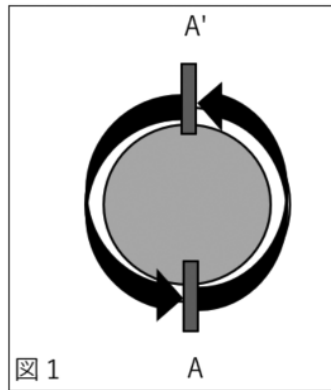


図 1

¹⁷ “还”について多くの研究のある、前田真砂美先生の考え方です。

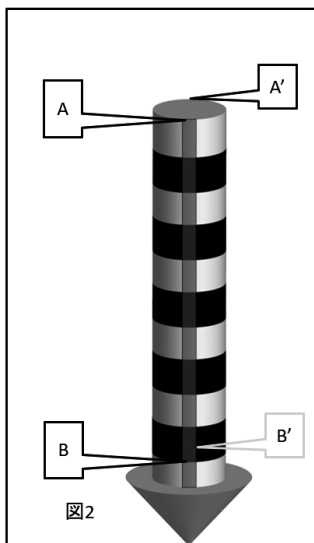


図2

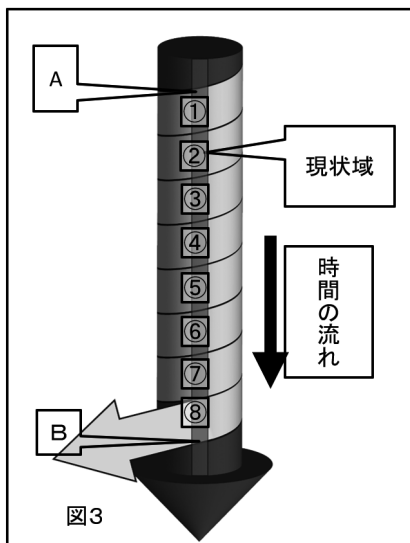
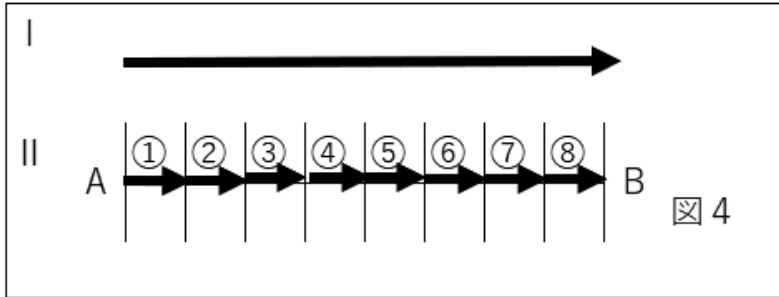


図3

界A'を通過してAに戻ってくるイメージです。現図1を別の角度から見たものが図2です。実はこの行って帰ってきた黒矢印は円筒形の矢印に巻き付いています。この、上(A)から下(B)に向かっている円筒形の矢印は時間軸を表していると思ってください。黒い帯が5本見えますが、これは図1のA→A'→Aと動いた矢印が5本あることを表しています。さらこの黒い帯の密度を高くしてみたものが図3のようになります。見やすいように少し色の濃淡を変えましたが、「現状域」を出発した帯状の矢印は、時間の流れを表している円筒形の矢印に巻き付いて、らせん状に下に向かっていきます。

「現状域」とは、今の状態が展開されている世界です。たとえば本を読んでいるとしましょう。現状域と書かれたやや濃いめの帯は、その「本を読んでいる」世界線です。この帯はAからBまで続いています。これは「本を読んでいる」状態が現状域の世界線のAから、①～⑧の各時点を経てB時点まで続いていることを示しています。これが最初に出しましたB<まだ・なお一状況の持続>です。

でも「ある状態がずっと続いている」ということなら、こんな面倒な図にしないで、単純に下向き矢印を一本描けばよさそうですが、実は“還



はそんなにすんなり時間を下ってくれるものではありません。わざわざ時間の円筒をぐるぐる回って降りてくる図にしたのは、この帯が現状域の裏側、つまり、いったん「本を読んでいない世界線」に行かせてまた元の「本を読んでいる」世界線に戻ってこさせるためです。もちろん、実際の行動として本を読んだり読むのをやめたりしているわけではありません。「本を読むのをやめる」可能性がありつつ、それでも結果的に次の瞬間も本を読み続けているということを表現している図です。

図3の角度を変えて横向きに平面的に描いたものが図4Ⅱになります。①～⑧の黒の矢印の束は、図3の円筒形の太い矢印と同じものですが、図4では時間が左から右に流れています。Ⅰは矢印がスムーズに未来に向かっていきます。一方Ⅱには黒い縦線が入っていて、矢印がその分だけ細かく進んでいます。図4Ⅱの矢印一つは、図3の矢印の帯が現状域から出発して次の現状域まで一周する分に相当します。“还”が表す「～し続けている」は、Ⅰのようなスムーズな直線ではなく、Ⅱのように1ステップずつ進んでいった結果一直線上に続いているというイメージです。

では例文を見ていきましょう。Aの「行為の重複・付け足し」は、図4で言えば、帯の矢印がステップずつ進むイメージです。例文1なら、「汾酒を飲む」で矢印一つ、「ビールを飲む」で矢印一つ、という感じですね。例文2なら、矢印をもう一つ進めるかどうかたずねていると考えていいでしょう。矢印を一つ付け加えて線を延ばすイメージだと思って下さい。このイメージが使われるのが“除了A以外、B也(还)C(AのほかにもBもCである)”の構文ですが、“也”が「AのほかにもBもCという

同じ性質を持っている。」というニュアンスを表すのに対して“还”は「Aにプラスして(さらに)Cもある(する)。」というニュアンスを表します。前の節と後ろの節の主語が異なる場合は“也”しか使えません。表したいのは二つのものか同じ性質を持っているということだからです。

<例 a>“除了我以外，我妹妹也喜欢看漫画。(私のほか、妹もマンガを読むのが好きだ。)”→“×除了我以外，我妹妹还喜欢看漫画。”

逆に、一つのグループの説明で「これもある、あれもある」といった追加のニュアンスを出したい場合は、連続性の中での追加のニュアンスを持つ“还”が優勢です。

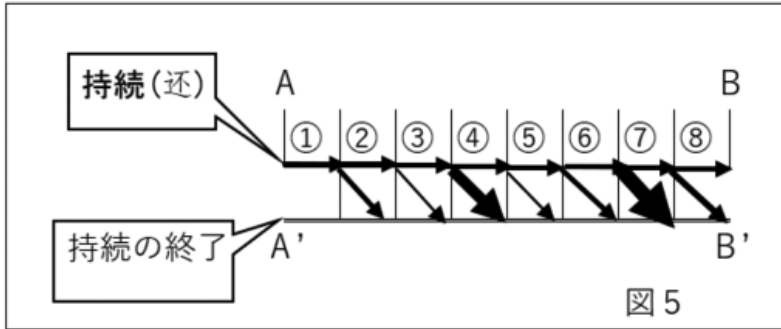
<例 b>小组的成员除了我以外，还有李二和张三。(グループのメンバーは、私の他に李二と張三がいる。)

B「状況の持続」は、冒頭に申し上げたように“还”の重要なイメージです。実現(完了)、変化「已经～了”(もう～した)の否定は“还没～(まだ～していない)”ですが、あることがらが「実現(完了)」した、というのは、今までの状況と一続きではないということです。たとえば「已经分手了(もう別れた)」というのは、「つきあっている状態」から変化しています。例文3「“还没分手”(まだ別れていない)」は、(仮に二人の間が冷え切っているとしても)現在も「つきあっている」という線上にあり続けています。つまり「同じ状況であり続ける」“还”は「実現・変化」を否定する文と大変相性がいいわけです。

例文4の“，我还在吃呢”。は“还没吃完(まだ食べ終わっていない)”と同じ意味で使われていますので「まだ」と訳せばよいでしょう。例文5“我和大介的关系还是老样子，只是青梅竹马。(私と大介との関係はやはりずっと以前のまま、ただの幼なじみ。)”では、“还”は「やはり」に相当しますが、過去も現在も「私と彼との『おさなじみ』の関係」という同じ線上に乗っているというイメージです。

C<もっと一量や程度の進展・拡大>を取り上げる前に、この**B「状況の持続」**と**D「話し手/聞き手の想定外」**の関係から解説します。

「同じ状況であり続ける」と「想定外」とは結びつきにくく感じられそうですが、実はそうではなく、むしろB「状況の持続」も多分に想定



外のイメージを持っております。例えば例文4“别把碗收走，我还在吃呢。”なら「あなたは私がもう食べ終わったと思って片付けようとしているのかもしれないが」という気持ちを言外に含みます。Aもそうです。1なら、汾酒一瓶で普通の人なら十分酔ってしまう量ですが、まだ追加でビール三本飲んだ、というのは、文脈によっては十分な「想定外」になります。

先に「一本の矢印がスムーズに未来に向かっていくのではなく、1ステップずつ進んでいった結果一直線上に続くというイメージ」と説明したのは、「还」が描く「持続」を進むには、図3の矢印の帯を一周ずつ進めていく必要があるわけですが、なんらかの力をかけないと、帯は遠心力でどこかに飛んでいってしまっ、もとの現状域に戻ってこない可能性が多分にあるからです。例文5“我和大介的关系还是老样子，只是青梅竹马。”について、図5とともに見ていきましょう。「持続」と書かれた線は「ただのおさななじみ」で居続ける現状域が続く状況、「持続の終了」の線は、晴れて彼氏—彼女の関係に進展する世界線（図3のA'→B'に相当します）だとします。「持続」から「持続の終了」、まで、さまざまな太さの斜め下矢印が降りてきて、持続の終了を促しています。太さの違いはそちらに行く可能性の違いだと思ってください。持続の矢印より太い矢印が二本ありますが、この時は特に持続の矢印を逸れて、持続の終了に行く可能性の方が高いイベントがありました。この子は、大人っぽい服を着てみたり、髪型を変えたりして大介くんにも異性として見てもらおうとしていているのだから、大介くんも太い矢印の方にそれ

て、「私」を異性として意識してくれてもいいのに、大介くんは「私」の想定外に「幼なじみ」の矢印A-Bの上であり続けているということです。

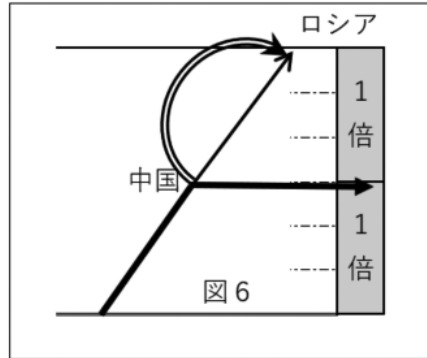
このように“还”の「持続」は「想定外」と両立することがおわかりいただけたと思いますが、どちらのニュアンスがより強くでるのかは文の性質や文脈によります。

例文8：“都8点了，你还来得及吗？”は「8時が間に合う時刻であり続けるかどうか」をたずねているので「持続」のニュアンスを持ちますが、同時に「本当に大丈夫？間に合う？」という、「間に合ったら想定外」という気持ちも含みます。10：“炸臭豆腐还挺好吃的。”は「すさまじい匂いがする食べ物からおいしくないと思いつつ口に入れたら、存外おいしいではないか」というニュアンスですが、すでに「持続」ニュアンスは表に出ません。ちなみに、この「存外」の“还”は“真”と相性がよく、“还真”で「思いのほか、存外」と覚えておいても差し支えありません。

10：“我剪发了…，还算可爱吗？”は、「かわいい」の線に乗っていると考えることもできますが、「自分としては自信がないのだけど、どうかなあ」という語感を持ちます。これも「かわいい」と言ってもらえるのが「想定外」と捉えます。知り合いと会ったときにA：你最近怎么样？（最近どう？）B：还可以（まあまあかな）。などというやりとりをしますが、この「まあまあ」の“还”も「この程度では「よい」ということはできない（＝想定外）かもしれないが」という語感から導き出されます。この二つの文からは話者の謙遜が感じられますが、自己紹介でも“还请多指教”（何卒宜しく願いいたします）と“还”をつけて謙遜のニュアンスを表すことがあります。また、“我还以为是什么呢，都交给我吧！”（またなにかと思ったよ、＜そんなことなら＞私に任せなさい。）のように“还以为～呢”（～かと思ったよ）」という固定フレーズがあります。“以为”は「～と思っていたが実は違っていた」という意味でも使うことばで、意外性の“还”と大変相性がいいのです。

さて、**C<もっと一量や程度の進展・拡大>**に戻ります。これは純粹な二つの比較をしたいというよりは、あるものの程度の高さを表すために、一般的に程度の高いものを指標に出し、それよりもっと高いことを示すことによって、そのものの程度が高いことを効果的に示します。

例文6：“俄罗斯比中国还大一倍。”は構文としては「A比B还C」（AはBよりもっとC）を使った比較形」と説明されます。図6では、斜め上に向かう矢印が「状況の持続（図3のA～Bの世界線）」を表しています。これは「大きい国」の世界線です。ただ、スタートから



から「大きい国」のゴールであるロシアに向かって1ステップずつ進んでいくというより、ロシア位置を示すために、その手前のステップである中国を示してから、ロシアの位置がそこからさらに1ステップ先にあることを表している、と考えてください。「中国」から真横に伸びる線は、ちょうど図5の「持続」から「持続の終了」に伸びる線に相当します。中国は、「大きい国に向かって進んでいく世界線」の終点であってもおかしくないくらい大きいと認識されているとしましょう（実際にとてつもなく大きいですけど）。ここで終わっても不思議ではない「大きい国ランキング」の世界線をさらに伸ばすとそこにロシアが存在している、ということを図6は表しています。つまり、「A比B还C」構文は、「そこで状況の継続が終わっても不思議でないくらい程度の高いB」を引き合いに出して、「Aは実はそれより上に存在している」ことを表しています。この意味でも“还”は「意外性」と「持続」を合わせ持つニュアンスを表す語だといえます。

同じく「もっと/さらに」と訳す構文に“A比B更C”があります。両者は時に入れ替え可能ですが、表したいことの重点に違いがあります。例えば“中国比澳大利亚大，俄罗斯比中国更大。”（中国（中国）はオーストラリア（澳大利亚）より大きい。ロシアは中国よりさらに大きい。）は、まさに比較で、表したいことは、中国>オーストラリア/ロシア>中国。です。“更”の場合はその守備範囲は「どちらが大きい」までで、例文6のように具体的な数字を入れて「どのくらい」という表現はできません。“还”の方は、ロシアの広さの程度を表す構文なので、「中国の

1 倍分 (= 中国の 2 倍)」という具体的な数字を示すことによって大きさの程度を表現することもできるのです。

7 「本棚より大きい」というのは、日本人にとってはよくわからない表現ですが、先述の前田真砂美先生によると、中国では、背の高さを表すのに効果的なものの典型だそうです¹⁸。6 にせよ 7 にせよ、主語 (A) がいかに大きいか・高いかを言いたいわけですから、比較対象 (B) も大きい・高いと聞き手が認識できるものでなくてはなりません。

E<よくもまあ—皮肉や批判>は自分にとっての「想定外」で相手を批判する例です。11「美玲你贪吃零食还好意思说瘦不下来吗？」は、「お菓子食べまくれば痩せないと思う」のが普通の思考なのに、お菓子を食べまくっているのに「私、水を飲んでも太っちゃうの」などというメイリンは、話者にとっての「想定外」です。「好意思」は“不好意思 (はずかしい、申し訳ない)”の対義語ですので、「恥ずかしげもなく」という意味です。12: 亏你还是个哥哥! 妹妹的心情, 你一点儿也不懂。の“亏~还”は「~のくせに」という表現で、お兄ちゃんは妹のことを大事にする、というのは当たり前のことなのに、その当たり前をしないお兄ちゃんは「想定外」ということです。

3 : 結語

本稿では、多義語“还”の意味を通底する前田 (2007) の「事態の傾き—現状回帰モデル」と、初学者向け教材として中心に据えるべき「行為の持続・進行」「項目・数量の増加」イメージとを聯繫させるために、「事態の傾き—現状回帰」が間断なく行われることを示す「1 ステップ進行モデル」を作成した。

原義部分は円筒形モデルで示し、実際の例文解説ではそれを単純な平面図に直して説明を加えた。

原義解説部分では一回の「事態の傾き—現状回帰」を 1 ステップとして、それが螺旋を描きつつ 1 ステップずつ進むモデル (図 3) を作成し、手前側の「現状が持続する世界線」と反対側の「終了する世界線」の二

¹⁸ 前田 (2011)、pp.132-133。

つを意識させた上で、「还huan」の原義である「行って帰る」を示した。

例文解説部分では「行って戻る」を後景化させ、単純に1ステップずつ矢印が進行するモデル(図4)を作成した。「1ステップずつ」というアプローチは「項目・数量の増加」の、「進んでいく」は「行為の持続・進行」のイメージを構築する上で重要である。

ここから「反予期」に展開するために、「終了する世界線に行く可能性」がありつつ1ステップ進行していることを示す分岐の矢印を加えた(図5)。そして時に「持続する世界線」に向かう矢印より「終了する世界線」に向かう矢印を太くすることによって、持続側に進むことが予想外である、「反予期」意味が立ち上がることを示した。

論者の見通しとしては、他の可能性を含みながら一つを選択することを示す“还是”(やはり)についても、図5の分岐のイメージから導き出すことができると考えているが、「持続」されたものが何であるのか、について十分な検討ができなかった。今後の課題としたい。

参考文献

日本語文献

川田健(2019)「副詞「才」のイメージ—初級中国語教育の実践例」,『日本漢詩文学会会報』, 6, pp.4-8

沈家煊(崔麗函・西村英希訳)(2018)「副詞“还”に関わる二種類の定型表現」『認知と中国語文法』, 日中言語文化出版社, pp.154-182

前田真砂美(2011)「“比字句”における“还”と“更”—“差”と“たとえ”の表現—」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』14

前田真砂美(2007)「副詞“还”の認知的意味分析」,『中国語学』, 254, pp.241-262

三宅登之(2005)「中国語文法プロフィール」,『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』, (2005), 東京外国語大学外国語学部 平成14-16年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書pp.126-137

中国語文献

沈家煊(2001)「跟副词“还”有关的两个句式」,『中国语文』, 2001年06期,

pp.483-493

- 高增霞 (2002) 「副词“还”的基本义」, 『世界汉语教学』, 2002年02期, pp.28-34
- 蒋静丽, 蒋静忠 (2016) 「副词“还”表主观量研究」, 『鸡西大学学报』, 2016年07期, pp.151-153
- 蒋协众 (2013) 「日本留学生汉语副词“还”的习得考察——基于HSK 动态作文语料库的研究」, 『海外华文教育』, 2013年01期, pp.71-78
- 金立鑫, 崔圭铤 (2018) 「复续义“又、再、还、也”的句法语义特征」, 『语言教学与研究』, 2018年05期, pp.34-42
- 罗芬 (2016) 「句式“都XP 了, 还VP 呢”的主观性分析」, 『齐齐哈尔大学学报 (哲学社会科学版)』, 2016年09期, pp.8-11
- 李冬梅 (2015) 「副词“还”的“停留于发展过程中的早期阶段”义」, 『汉语学习』, 2015年06期, pp.28-36
- 刘娅莉, 王玉响 (2019) 「副词“还”的“反预设”功能」, 『四川师范大学学报 (社会科学版)』, 2019年03期, pp.108-113
- 吕叔湘主编 (1999) 『现代汉语八百词』 (增订本), 商务印书馆
- 唐敏 (2009) 「副词“还”的“反预期”语用功能及“反预期”的义源追溯」, 『江苏大学学报 (社会科学版)』, 2009年04期, pp.69-73
- 童小娥 (2004) 「副词_还_各义项的发展演变及其语义网络系统」, 『西南民族大学学报 人文社科版』, 2004年08期, pp.448-452
- 武果 (2009) 「副词“还”的主观性用法」, 『世界汉语教学』, 2009年03期, pp.322-333

なお図2、3の作成には慶應義塾大学総合政策学部の外館悠氏を煩わせた。
特記して謝意を示したい。